

自伝的記憶としてのWEB日記——内容と文体の性差の検討——

山下清美・藤波尚美
(専修大学経営学部・文学研究科)

Web-diaries as autobiographical memories—the gender differences of the contents and the style—

Kiyomi YAMASHITA, Naomi FUJINAMI

(Senshu University, School of Business Administration, Graduate School of Literature)

1. WEB日記と自伝的記憶

WEB日記とは、インターネット上の個人ページに書かれる日記である。WEB日記のリンク集として有名な「日記猿人」には5800件を超える日記が登録されているし、1999年6月にスタートしたレンタルの「さるさる日記」の登録数も6000件に達している。なぜこれほど多くの人々がネット上に自分のことを書くのだろうか。

自分という存在を明確にしたい時、人は自分のことを語る。自己とはまさにこの自己物語の構築に他ならない。「自分のことを語る」には、聞き手としての他者が求められる(1)。現実世界での他者とのコミュニケーションが希薄になりつつあると言われる現代社会で、WEB日記は、自分のことを他者に向かって語りたいという思いを手軽にかなえられる場となっている可能性がある(2)。ネット上に日記を書く、ということ、個人の秘密を他人目にさらすようで理解できない、という反応が一般に多いが、インターネットは、利害関係の生じやすい身近な人ではなく、ある程度距離を置くことのできる不特定な人を聞き手として想定できるので、むしろ「自分のことを語る」には好都合なのかもしれない。

自己物語の基礎になるのは、自分にまつわる過去の記憶、つまり自伝的記憶である。自伝的記憶の内容には、直接経験した出来事や見聞きした情報などの事実だけでなく、気持ちや考えなどの内面的な心情も含まれる。WEB日記は、まさにそうした事実や心情の記録として書かれており(3)、現在進行形の自伝的記憶の記録と考えることができる。

2. 自伝的記憶とWEB日記の性差

ところで自伝的記憶研究では、自伝的記憶の内容が自己概念と関係がある可能性がしばしば検討されており、特に性差による自伝的記憶の内容や形式の違いが明らかにされている(4,5,6)。その違いとは主に、男性(男子)に比べて女性(女子)の自伝的記憶は長く詳細で、他者との関係をテーマとしたものが多いというものである。例えばBucknerら(4)は、男女の児童に、自己に関連する

9つのテーマについて過去の出来事を思い出して記述させ、その内容を分析した結果、女子の方が記述が長く複雑で、また他者への言及が多いことを明らかにした。

本研究の目的は、こうした自伝的記憶に見られる男女差が、WEB日記の特徴としても確認できるかどうかを検討することにある。

日本のインターネット利用者は、数年前まで圧倒的に男性が多かったが、現在は急激に女性の比率が上がってきている(例えばサイバースペース・ジャパンの調査によると、女性の比率は、1995年6月にはわずか4.4%だったが、1998年12月には33.4%になっている。)さらに、日本の大学生を対象としたインターネットに対する意識調査(7)によると、インターネットを利用しているという回答は、男性59.9%に対し女性71.6%で、むしろ女性の方がインターネットに対して積極的である。さらに、ホームページについては男性の方が女性より頻繁に閲覧しているが、電子メールについては女性の方が男性よりコンスタントに利用しているという結果となった。ここから女性は、他者とのコミュニケーション手段としてのインターネットの利用に特に積極的である可能性が指摘できる。

WEB日記もまた読者とのコミュニケーションが意識される場である(8)。ただし日記自体に読者を意識した記述が頻繁に出てくるわけではなく、むしろ例外的に時折読者への呼びかけや読者からのフィードバックに対するお礼などが挿入されることが多い。こうした読者への意識は、文体の変化として明示される場合がある。「である」調を基本とするWEB日記の場合、読者への語りかけの部分では突然「ですます」調に変化することが多い(2)。

以上により、本研究では次の仮説を立てる。

1. 女性のWEB日記には男性のWEB日記に比べて、他者への言及の頻度が多い。
2. 男性のWEB日記には「である」調で統一されたものが多く、女性のWEB日記には「である」調が基本であっても、「ですます」調が挿入されることが多い。

3. 方法

(1) 分析対象の選択

「日記猿人」の1999年6月のランキング・リストから、ホームページのプロフィールなどで作者が女性であることが確認できたWEB日記18編を選択した。選択の際、既婚か未婚か、子供がいるかいないか、仕事をしているかいないか、などの点で、いろいろな種類の事例が含まれるようにした。次に、同じく「日記猿人」の6月のランキングから男性のWEB日記を選択したが、男性のWEB日記作者には独身で単身生活をしている人が非常に多いため、女性とのバランスをとるために、家族の有無や年齢層が女性作者とできる限り対応するようにして18編を選択した。これら36編の日記について、原則として6月1日からの10日分の日記をを分析対象とした。

(2) 分析方法

A.他者への言及:各日記の1日分の記述について、夫(妻)ないし恋人、夫(妻)以外の家族、仕事関係の人、友人・知人、その他(不特定の他者)の5つの項目について、該当する他者への言及が1回でもあれば1を、なければ0を記録した。各項目ごとに10日分のカウントを合計して、他者への言及の度合いとみなした。

B.文体:各日記の1日分の記述について、完全に「ですます」調であれば1を、完全に「である」調であれば0を記録した。「ですます」調と「である」調がほぼ同量に混在している場合は0.5、「ですます」調が基本で一部「である」調が含まれる場合は0.8、逆に「である」調が基本で一部「ですます」調が含まれる場合は0.2と記録した。10日分のカウントを平均して、文体の特徴とした。

4. 結果と考察

他者への言及の度合いの男女各18名の平均は表1のようになった。

表1 他者への言及の度合いの平均値

	夫(妻)	家族	仕事	友人	他	計
女性	2.61	3.17	1.83	2.33	1.22	11.17
男性	0.56	0.89	2.33	1.83	2.22	7.83

5項目の合計について見ると、女性は男性より有意に他者への言及の度合いが多かった($t(34)=2.83, p<.01$)。また項目別に見ると、夫(妻)への言及($t=3.22, p<.01$)と家族への言及($t=3.13, p<.01$)で有意に女性の方が多かった。それ以外の項目では有意差はなかった。

女性のWEB日記は男性に比べて、他者への言及が多く、この点夫や恋人、家族への言及に特徴

的であった。男性は仕事上の人間関係で女性より言及が多い傾向が見られた。

文体の特徴を5段階に分類して、男女別に該当する人数を表2に示した。(0は一貫して「である」調、1は一貫して「ですます」調。)

表2 文体の特徴の分布

	0	~0.2	~0.8	~1	1
女性	4	7	5	0	1
男性	7	6	2	3	0

女性と男性の間で有意差はみられなかったものの、一貫して「である」調を用いる人数は女性4名に対して男性7名で、多かった。ただし、「である」調を基本として「ですます」調が一部含まれるタイプは、男性、女性ともに多かった。

「である」調を基本として時々読者への呼びかけが含まれる(「ですます」調に変化する)という文体の特徴は、男女ともに見られたが、一貫して「である」調で統一された文体は男性の方に多く見られる傾向があった。

WEB日記の内容や文体についても、女性の方が男性より、他者との関係や読者への意識が強く現れるという性差が見られることが確認できた。

文献

- (1) 榎本博明 1999 <私>の心理学的探求 有斐閣
- (2) 山下清美 印刷中WEB日記は日記であって日記でない 川浦康至(編) 日記コミュニケーション 現代のエスプリ 至文堂
- (3) Kawaura, Y., Kawakami, Y., and Ymashita, K. 1998 Keeping a diary in cyberspace. *Japanese Psychological Research*, 40, 234-245.
- (4) Buckner and Fivush 1998 Gender and self in children's autobiographical narratives. *Applied Cognitive Psychology*, 12, 407-429.
- (5) Shwartz 1984 Earliest memories: Sex differences and the meaning of experience. *Imagination, Cognition and Personality*, 4, 43-52.
- (6) Thorne 1995 Developmental truths in memories of childhood and adolescence. *Journal of Personality*, 63, 139-163.
- (7) 電子ネットワーク研究会 1999 電子ネットワークと市民社会・市民文化形成: 第1分冊 <http://www.mediacom.keio.ac.jp/~kawasaki/info/mid1/>
- (8) 川浦康至、山下清美、川上善郎 1999 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか 社会心理学研究 14, 133-143.